

君のノート

JALBAS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、「君の名は。」の三葉が、瀧とでは無く他のアニメの主人公と入れ替わったら……

5回目は……これ、本当に書いていいのか悩んだんですが、思い切って書いてみました……相手は、「DEATH NOTE」の夜神月です。

読んで頂ければ幸いです。

目次

〈	最終話	〉	76
〈	第七話	〉	67
〈	第六話	〉	57
〈	第五話	〉	47
〈	第四話	〉	37
〈	第三話	〉	27
〈	第二話	〉	15
〈	第一話	〉	1

《 第一話 》

「ん．．．んんっ．．．．．」

な．．．どこ？ここ．．．．．

私は、見たこともない、部屋のベッドで目が覚める。もしかして．．．これも夢？
体を起こして、部屋を見渡す．．．姿見や、化粧台は無い。置かれている家具や、部
屋の装飾を見ても．．．何か、女の子の部屋っぽく無い．．．

体にも、違和感を感じる。喉が妙に重い、視線を下に落としてみると．．．胸が．．
無い？．．．逆に下半身には．．．何かある？ええくくっ？

起きて戸惑う彼女を．．．いや、姿は男なので彼を、部屋の上方から見つめている影
がひとつ．．．彼には、見えていない。髑髏のような異形な顔、逆立った髪、黒い体
に黒い翼を持つ、死神のリユークだ。

「何だ？．．．様子がおかしいな、月の奴．．．ん？」

リユークは気付く。月の顔を見ても、彼の名前と寿命が見えない事に．．．

「何だ？何で、月の名前も、寿命も見えない？こいつは、まだ生きてるのに？」

「おい！月ー！」

リユークは、月に声を掛ける。しかし、月は全く気付かない。それどころか、ベッドから起きて部屋を動き回って、リユークの方に顔を向けているのにも関わらず、リユークの存在に気付いていない。

「こいつ……俺が見えてない……月じゃねえのか？」

その時、ドアをノックする音がした。

『お兄ちゃん、こはんだよー！』

え？……お兄ちゃん？……ということとは、やっぱり私、男の子になつてるの？壁に掛けてあつた制服に着替えて、私は下に降りる。まず洗面所を探し、洗面台の鏡を覗き込む。

こ……これが、私？

そこには、ちよつとニヒルな感じの、イケメン男子の顔があつた。

ほ……本当に、男の子になつてる……神様が、私の願い（来世は、東京のイケメン男子にして下さい）を適えてくれたの？でも、まだ、来世じゃ無いけど……顔を洗つて、リビングに行く。既に皆、食卓に付いて朝食を食べている。先程声を掛けてきた妹、母親の2人だ。父親は居ないのかな？それとも、もう会社に行つてしまつたのかな？

「お……おはよう……」

控えめな声で挨拶をして、食卓に付く。テーブルの横にテレビがあり、ニュースが流れている。

『昨夜、また刑務所内で、服役者が心臓麻痺により亡くなりました……』

「これって、またキラの仕業かな？」

キラ？……何？それ？……何で、心臓麻痺が誰かの仕業なの？

「お父さん、いつになったら帰って来るのかな？」

ああ、父親はいるんだ。どこかに、出張に行ってるの？お仕事は、何なんだろう？

「やっぱり、キラが捕まるまで、帰って来れないのかな？」

捕まる？……キラって人を捕まえるの？じゃあ、警察官？

「お兄ちゃん、今朝は、何も言わないんだね？いつもは、キラのニュースが流れると、色々言ってくるのに。」

「う……うん……」

何も、言える訳が無い。キラなんて知らないし、この家の事も、今の自分の事も分からないんだから……

食事を終えた後、妹は学校に行ったが、私は一度部屋に戻った。この男の子の名前も分からないし、学校の場所も分からない。まず、それを調べないと……

スマホは、ロックが掛かっていて中を見れなかった。机の中や鞆を調べて、日記と学生証は見つけた。名前は、「夜神月」。月と書いて「ライト」と読むらしい、珍しい名前だ。学年は3年、私より年上だ。学校の住所は分かったが、それが、何処にあるのかは分からない。スマホはロックされているから、GPSは使えない……

まさか仮病を使って、ずっと部屋に居る訳にもいかないので、とりあえず家を出て最寄の駅に向かう……と言っても、何処に駅があるのか分からないんだけど……リユークは、月の後ろに浮かんで、ずっと付いていた。

「何だ？こいつ、いつもと、全然違う方向に歩いていくぞ？」

歩けど歩けど、駅に着かない。何なの？この町……家が有り過ぎて、全然先が見えない……ここ……これが、東京？何か、抱いていたイメージと、違う……散々迷って、やっと駅に着いた。しかし……

だ……駄目だ、どの駅で降りればいいのか分からない……

結局、私は引き返す事にした。家に帰って、地図帳でも何でも引つ張り出して、まず学校への行き方を確認しなくっちゃ！だけ……

どうやってここまでできたのか、覚えて無い……どう帰ればいいのか？

私は、また散々迷った挙句、見つけた公園のベンチに座っていた。

ど……どうすればいいの？帰り方が分からない……私、このまま……

目から、涙が溢れてきた。

その様子を、ずっと見ていたリユークだが、とうとう痺れを切らし、一旦その場を離れて夜神家に帰る。月の部屋に入り、月が隠していたデスクノートの切れ端を持ち、再び月の居る公園に戻る。そしてその切れ端を、今の月の目の前に落とす。

あら？・・・何？これ？

月は、その切れ端を拾う・・・そして・・・

「きやああああああつ！」

突然、目の前に現れた死神を見て、悲鳴を上げる。幸い、公園には人が居なかったため、何事かと人が集まる事は無かった。

「あ・・・ああ・・・」

あまりの驚きで、月（三葉）は、それ以上声が出なかった。

「心配すんな、俺は、お前には何もしねえよ。ただ、悪い事は言わねえから、これ以上大きな声は出さな。そうしないと、大変な事になるぜ！」

「は・・・はい・・・」

月は、とりあえず、言われるままに従った。

「さて、質問だ。お前、いったい誰だ？月じゃねえよな？」

「み・・・みつは・・・宮水・・・三葉です・・・あ・・・あなたは？」

「俺か？俺は、死神だよ。死神、リユークだ！」

「ひっ……し……死神？」

「だから……そんなに怯えんなって、何もしねえって、言っただろ！」

そんな事を言われても、中身は普通の女の子なのだから、怯えるなどというのは無理な話である。

「で……何でお前、月と入れ替わってんだ？」

「え？……い……入れ替わってる？」

そうか、私は、この男の子と入れ替わっていたんだ……でも、よりによって、死神に憑りつかれた男の子と入れ替わるなんて！

「な……何でって言われても……こ……こつちが、聞きたいです……」

「そうか……訳は、知らねえのか？」

「あ……あなたこそ……な……何で、この男の子に憑りついているんですか？」

「はあ？……そいつが、俺のデスノートの所有者だからさ。」

「で……デスノート？……な……何ですか？それ……」

朝、目が覚めて、直ぐに体の異変に気付く……何か、体が軽い……それと、胸のあたりが何か重い……

目を開け、起き上がると……何だ？この部屋は……畳敷きに布団を敷いて……壁に、学校の制服が掛かっているが、女子の制服だ。何より……何だ？この女物のパジャマは？僕は、こんな物を着て寝た覚えは……

「どうしたん？お姉ちゃん？」

気が付くと、右手の襖が開いていて、そこに一人の幼女が立っていた。

「お……お姉ちゃん？」

僕は、自分を指さして問う。

「他に誰がおんねん……は……ん！」

そう叫んで、幼女は乱暴に襖を閉めて、下に降りて行つた。

僕が、お姉ちゃん？……さっきの体の違和感を思い出し、そつと下を見ると……

胸に見慣れない盛り上がり、谷間が……

「何だ？これは?！」

思わず、立ち上がってしまう。よく部屋を見渡すと、目の前に大きな姿見がある。僕は、そこまで歩み寄って、自分の姿をじっくりと見る。

こ……これが、僕の顔？ど……どう見ても女だ！

何で、僕が女になっている？いつたい、ここは何処だ？……だが、考えても答えが出る訳は無い。とりあえず、僕は部屋の中を調べた。

所持品で確認する限り、今の僕は「宮水三葉」という女子高生になっているようだ。学年は2年、僕よりひとつ下か？ここは、岐阜県の糸守町というところらしい。窓の外を見た感じでは、かなり山の中のド田舎だ。

何故？僕がこの女になっているのかは、分からない。デスクノートの後遺症か？そんな後遺症があるとは聞いていないが、リユークが言わなかっただけか？

考え込んでいても答えは出そうにないので、僕は、壁に掛けてある制服を着て下に降りた。

「お姉ちゃん！はよせんと、学校に遅れるよー」

先程の妹が、囁し立てて来る。その向かいに、婆さんが座っている。家族はこの2人だけか？父親と母親は居ないのか？

食卓に着いて、食べようとしたその時、

『皆様、おはようございます。』

突然、鴨居に設置されたスピーカーから声が出る。な．．．何だ？有線か？

『糸守町から、朝のお知らせです。来月20日に行われる、糸守町町長選挙について：』
と、そこで声が途切れた。婆さんが、スピーカーのコンセントを抜いたのだ。婆さんは、そのままテレビの電源を入れる。

「いい加減に、仲直りしないよ。」

妹が、そう言う。仲直り? . . . 誰と?

そう考えていた時に、テレビのニュースが耳に入る。

『1200年に一度という彗星の来訪が、いよいよ一月後に迫っています . . . 』

彗星? 一月後? そんな話、聞いた事が無い。どういうことだ?

朝食を終え、家を出て学校に向かう。妹と途中で別れ、1人で通学路を歩く。

学校は、糸守高校。自分の部屋からも、湖を挟んで対岸の丘の上に見えた。周りにも、同じ高校の生徒が何人も歩いているので、迷う事も無い。

歩きながら考える。

これは夢なのか? だが、意識ははつきりしている。夢とは思えない 最も、夢の中で自分で “これは夢だ” と認識する事も、殆ど無いと思うが

「三葉〜!」

その時、後ろから声をかけられ、振り返る。

自転車に2人乗りした男女が、こちらに寄つて来る。この女の交友関係は、部屋にあつた生徒名簿と日記から、おおよそ理解している。このガタイの良い坊主頭は “勅使河原克彦”、この女は “テツシー” と呼んでいる。女の方は “名取早耶香”、この女は “サヤちゃん” と呼んでいる。特に親しい友人は、この2人だけだ。

今のこの状況が、夢なのか、デスノートの試練なのか、まだ分からない。一応は、順

応しておいた方が無難だろう。

「お・・おはよう・・・サヤちゃん・・テツシー・・」

とりあえず、普通に挨拶を返した。

「あれ？三葉、何なん？その頭？」

「え？・・・」

「無造作に纏めてるだけで・・・いつものように、結つてないけど・・」

「ほんまや！それじゃ、まるで侍やな！」

髪が長く、部屋には纏めるためか組紐があつた。それで後ろで纏めたのだが、普段は、髪を結つて纏めているのか？

「あ・・ああ、ちよつと寝坊して・・・じ・・時間が無かつたから・・」

とりあえず、適当な事を言つて誤魔化した。

その後、学校に行つてからも大変だつた。

教室に入つても、まず自分の席が分からなかつた。しばらくは、立つて誤魔化し、始業直前に開いてる席に着いた。欠席者がいなくて助かつた。

授業中、名前を呼ばれたが、自分の名前では無いので最初は気付かなかつた。その場は、笑われるだけで済んだが・・・

昼休み、学校の校庭の隅で、テツシーとサヤちゃんと昼食を食べた。この3人は、いつ

もこうしているらしい。

「三葉、何か今日変やない？」

「え？・・・そ・・・そう？」

「自分から、あんま喋らへんし・・・」

「どっか悪いんか？」

「ん・・・ん・・・な・・・何とも無いよ・・・」

この連中の、会話を聞いていれば分かる・・・訛ってる。これでは、僕が喋ると、例え女言葉で喋っても、訛っていないので直ぐに怪しまれる。何も分からない今は、目立つのはまずい。できるだけ会話は最小限にして、乗り切るしかない。

何とか、学校ではボロを出さないよう気を付け、乗り切った。

家に帰っても、家族との接触は極力避け、部屋に籠っていた。風呂に入るように言われたが、適当に理由を付けて断った。慣れない女の体で、何かあってもまずいので。

寝床に入り、また色々と考えた。このまま、この体で生活続けるの事になるのか？ そうだとすると、今日のように、逃げ回ってばかりもいられない。

だが、そうなると、デスノートはここには無い。もう、キラの裁きを続ける事はできない。そもそも、僕の、自分の体はどうなっているんだ？ 誰か、他の人間が入っているのか？

ん？まさか、僕が入っているこの体の女が、僕の体に？……
目が覚めると、自分の部屋だ……体も、自分の体だ……どうやら、おかし
な夢でも見ていたようだ……

起き上がり、着替えようとしたところで、リユークに声を掛けられる。

「よう、今日は月だな？」

……今日は？

「どういう事だ？リユーク？」

「昨日は、三葉とかいう女と、入れ替わってたからよ。」

「三葉？入れ替わっていただと？」

じゃあ、昨日のは、夢では無かったのか？僕は、田舎の三葉という女と、入れ替わっ
ていたのか？……まさか、変な行動をして、警察に目を付けられたりしてはいない
だろうな？

「リユーク、その女、おかしな行動はしなかったか？自分が三葉だと、他人に言いまわつ
たりとか、異常に、目立つ行動をしたりとか？」

「ん？……他人に言いまわるどころか、知人には会えなかったな。道に迷ってたか
ら……目立った行動というと……まあ、俺の姿見て、悲鳴上げたくらいか……」

何?!

「待て、リユーク！何で、その女にお前が見えるんだ？デスノートに触らなければ、お前の姿は、人間には見えない筈だぞ！」

「ああ、俺が、お前が隠してた切れ端を、そいつに触らせたんだよ。」

「な・・・何だと？」

「仕方ねえだろ！お前が、全くの別人になつて、どこの誰かも分からねえんだ。本人に聞きたくても、こつちが見えねえんじや聞きようがねえ！おまけに、道に迷つて泣いてるしよ・・・」

「そんなもの聞かなくても、お前には死神の目があるだろう！」

「それが、死神の目で見ても、何にも見えなかつたんだよ！」

「何？・・・どういう事だ？」

「俺にも、分かんねえよ！」

本人以外が体に入っていると、死神の目でも、名前と寿命は見えないのか？・・・いや、そんな事より、デスノートをあの女に触らせたという事は・・・

「お前、デスノートの事も、そいつに話したのか？」

「ああ、そうしないと、俺の事も説明できねえからな。」

何という事だ、僕が、キラだという事を知られてしまったかも・・・

僕は、机の中からデスノートを取り出した。ページをめくり、空いているページに名

前を書き込む。

〃宮水三葉〃

「何だ？あの女、殺しちゃまうのか？」

「お前のせいだぞ。お前が、余計な事を教えるから……可哀想だが、キラの正体を知ってしまった可能性がある……足が付く前に、死んでもらう。あんな田舎の突然死なら、ニュースにも取り上げられないだろう。」

何故、こんな入れ替わりが起こったのかは謎だが、それもこれでお終いだ。あの女が死ねば、入れ替わりももう起こらない……

《 第二話 》

スマホのメロデーが、聞こえてくる……これは？……いつもの曲！

私は、目を開けて飛び起きる。そして、辺りを見回す……いつもの私の部屋……良かった、やっぱり夢だったんだ……そうだよ、死神なんて、いるわけ無いし……制服に着替えながら、夢の中の出来事を思い起こす。

でも、折角東京のイケメン男子になった夢見たのに、道に迷ってばかりって……東京って、本当にあんな所なのかな？おまけに、死神に憑りつかれてるって……だけど、姿は恐かったけど、酷い事はされてないな……迷った私を、家まで連れてつてくれて……何か、優しいかったな、あの死神さん……

そんな事を考えながら、下に降りる。

「お姉ちゃん、おそい！」

居間に入ると、四葉に叱られる。

「明日は、私が作るでね！」

そう言つて、ごはんをよそう。

「……今日は、普通やな……」

「昨日は、ヤバかったもんなあ……」

そう言つて、お婆ちゃんと同葉が、じつとこちらを見ている。

何なの？ いったい……

朝食を終え、通学の途に就く。

「三葉くっ！」

後ろから、サヤちゃんの声がある。振り返ると、サヤちゃんとテツシーが、いつものように自転車に2人乗りして近づいて来る。

「おはよう！ サヤちゃん、テツシー。」

「おはよう！ 今日は、ちゃんとしとんね。」

「え？ どういうこと？」

「髪のこと。昨日は、結つて無かったやん。」

「侍みたいやったな。」

「え？ 侍？」

昼休み、いつものように、校庭の隅で昼食をとる。

「三葉、今日は普通に喋るんやね？」

「え？ 私はいつもこうやけど……」

「でも、昨日は殆ど、自分からは話さへんかったやん。」

「ええ〜っ？」

な．．．何なの？それ．．．全然、覚えが無いんですけど．．．

「もしかして、狐憑きやったか？」

「何言ってるの、きつと、ストレスが溜まってんのよ．．．お祭りの事とか、町長選挙の事とか、三葉、気苦労多いに。」

「う〜〜ん．．．」

完全に、覚えが無い．．．と言うより、昨日の事が、思い出せない．．．変な夢なら、覚えてるんだけど．．．

朝、デスノートにあの女の名前を書いた。これでもう、問題は無い。

昨日、あの女は道が分からず、学校には行けなかったらしい。無断欠席になってしまったが、下手に学校に行かれて、おかしな行動を取られるよりはずっと良い。あんな田舎町の人間には、東京など迷路のようで満足には動けまい。僕のスマホは完全にロックしてあったから、例えば入れ替られても使われる心配は無い。

いつも通りに学校に行き、昨日の事は適当に誤魔化した。家に帰ってからは、またキラの裁きを行った。そして、何も心配する事無しに床に付いた．．．

だが、その次の日……僕は、またあの女の体で目を覚ました。

何故だ？僕は、間違いないでスノートに名前を書いた。名前は、学生証で確認している。顔は、姿見で穴が開くほど見た。間違っている事は絶対に無い！なのに……

「どうしたん？お姉ちゃん？」

布団の上で、半身を起こして呆けている僕を見て、妹が声を掛ける。

「ん？……いや、何でも……」

そこまで言いかけて、僕は妹に聞く。

「あ……あのさ、昨日って……ぼ……わ……私、何とも無かった？」

「？……何ともって？」

「調子、悪そうだったとか……急に、倒れたりしたとか……」

「何で、そんなこと聞くん？自分のことやる？」

「う……うん、そうなんだけど……」

「昨日は、何もおかしなかったけど……今日は、変だよ。」

「あ……そう……」

何だ、心臓発作も起こっていない……どういう事だ？

朝食を食べながら、テレビを見ていたが……おかし！囚人の、突然死のニュースが何も無い！僕は、昨夜も、何人もの犯罪者の名前をノートに書いた。いくらここが

ド田舎でも、ニュースは全国区の筈だ……

すると、また、この間と同じ彗星接近のニュースが流れる。

『いよいよ、ひと月後に迫ったティアマト彗星の最接近……』

ティアマト彗星？まてよ、この名前、聞いた覚えがある……そうだ！3年前に、地球に最接近した……3年前?!

僕は、部屋の周りを見渡した。そして、カレンダーを見つけ、年号を見る。

“2013年!”

そうか！時系列もずれていたのか！では、今は、僕の居た時間の3年前なのか？この女が死ななかつたのは、3年前の人間だったから……いや、もしかしたら、3年後には死んでいるから……まてよ、確か、この町の名は……

“糸守” そうだ、彗星の破片が落下して、崩壊した町の名だ！この三葉という女は、1ヶ月後、彗星の破片の落下に巻き込まれて死ぬんだ！

朝食を終え、通学の途に就く。2日前と同様に、途中テツシー達と合流する。今日も髪は結つて無いが、また時間が無かつたことにした。

歩きながら、また考えていた。

3年の時差がある以上、いくらデスノートに三葉の名前を書いても無駄だ。3年後には、三葉は居ないのだから……そうになると、この入れ替りを防ぐ手立ては無い。し

かし、ひと月後には彗星の破片が落下する。糸守は無くなり、三葉も居なくなる……。そうすれば、入れ替りも無くなる。それまでの間、何とかやり過ごすしか無い。

町営駐車場の前に差し掛かったところで、人だかりが見えた。誰かが、駐車場の敷地内で演説をしている。それを見物している人が、道の脇に集まっている。

演説をしている男は、肩から「現職・宮水としき」と書かれた、たすきを掛けている。

ああ、2日前の有線で言っていた、町長選挙の演説か？ん？…宮水？…この娘と同じ苗字だな？

人だかりの横を通り過ぎようとした時、そこに居た、3人組の高校生達に声を掛けられた。何やら嫌味めいた事を言われたが、何の事か分からなかった。この三葉という女の悪口なんだろうが、僕は本人では無いので気にもならない。このような輩は、どこにでもいるものだ。

また、考え事をしながら歩き出したので、俯いて少し猫背になっていた。その時、演説をしている男に怒鳴られた。

「三葉、胸張って歩かんか！」

え？…もしかして？

きよとんとした顔で、演説者の方を見る。周りの後援会の人々も、見物者も、皆こちらを向いている。そして、その人達の会話が聞こえてくる。

「身内にも敵しいな……」

「さすが町長やわ……」

え？あの人、この女の父親なのか？……じゃあ、何で一緒に暮らしていないんだ？三葉の父親は、この町の町長のようだ。何故、一緒に暮らしていないのかは知らないが、「町長の娘」という事で、色々と風当たりも強いようだ。

美術の授業中、朝嫌味を言っていた3人組が、また嫌味のような会話をしていた。

「……だから、町政なんて助成金をどう配るかだけやで、誰がやったって同じやー！」
「……でも、それで生活してる子もおるしな……」

こんな田舎の町長に、大して旨みも無いだろう。都会でいうなら、自治会の会長程度だろう。面倒くさいだけで、多分誰もやりたがらない。妬む方もどうかしている。

そう考えている時に、真ん中の男と目があつた。向こうは、嫌らしい笑みを浮かべている。

それでこつちが顔を背けると、愉快的気分になるのだろう。

だが、生憎僕はそこまでお人よしでは無い。こういう輩には、虫唾が走る。決している気分には、させてやらない……

僕は、その男の目を見つめて、軽蔑するするような笑みを浮かべてやった。相手は、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。こんな対応は、当然想定外だろう。そして、

気まずそうに目を逸らした。

以後、何度か目が合ったが、その度に僕は同じ笑みを返した。そしてその度に、男は同じように目を逸らしていた。

昼食時に、サヤちゃんが言ってくる。

「えらいね三葉、松本らの嫌味、気にも留めんで。」

「俺は腹が立った、一度、がつんと言つてやらな！」

「あかんよ、そんな事したら、余計に妬むで。」

「そうだな．．．逆に、笑つてやればいい．．．あんな、低俗な奴らは．．．」
『え?』

一瞬、空気が凍りついたような、静寂が辺りを包む。

し．．．しまった．．．つい、地が出てしまった．．．

2人は、怪訝な顔をしてこつちを見つめている。

「え?．．．私、今何か言つた?」

特に良いい訳も思いつかず、何かに、憑かされていたかのような態度をとつた。この間テツシーが、「狐憑き」とか言つていたので。

2人は、相変わらず怪訝そうな顔で、こつちを見続けていた。僕は、ずっとそ知らぬ顔をしていた。

とにかく、ひと月の間の我慢だ……

『お兄ちゃん！早く起きないと、学校遅刻するよ！』

妹の声と、ドアを叩く音で目が覚めた……え？お兄ちゃん？

はつとして飛び起きる……ここは……この間の、夢の……?!

私の目の前に、例の死神さんの顔が現れる。

「きゃあああああつ！」

思わず、悲鳴が出ってしまった。

『ど……どうしたの？お兄ちゃん？』

「い……いや……な……何でも……無い……何でも無いから！」

とつさに、そう言っていた。

『……まだ、寝ぼけてんの？とにかく、早くごはん食べないと遅刻するよ！』

そう言つて、妹は下に降りて行った。

私は、しばらく硬直して、死神さんと睨めっこをしていた。

「……お前、三葉か？」

「は……はい……」

「何で、生きてる？」

「え？な．．．何でって言われても．．．」

死神さんは、不思議そうに首をひねっている。私は、ようやく落ち着き、状況を理解する。また、夜神月くんになっているようだ．．．この間のは、夢じゃなかったの？ 私達、また入れ替ったの？

朝食の後、部屋に地図を広げ、駅までの道を確認する。そして、どの駅で降りれば学校に近いか、その駅から学校までの道も確認する。よし、これで何とか．．．

「お前、本当に学校に行くつもりなのか？」

「うん、そうやよ！」

ようやくこの死神さんにも慣れて、普通に話せるようになった。

「悪いことは言わねえから、やめとけ。」

「何で？勝手に休んだら、月くんだって困るやろ？」

「行った方が、困ると思うがな．．．」

死神さんには散々止められたが、私はそれを振り切って家を出た。そして駅に向かつて行ったのだが．．．

あれ？この道、さつきも通ったよね？

ちゃんと地図で確認して来たが、実際に歩くのはかなり勝手が違った。曲がるべき角を何度も間違え、その内、どの方向を向いているのか分からなくなり、同じところを何

度もぐるぐる回っていた。駅に着いたのは、家を出て1時間以上過ぎた後だった。

ようやく電車に乗り、学校の近くの駅で降りる。しかし……

あれ？南口……北口……どっちに行けばいいんだっけ？

散々悩んで南口で降りたが、どうやら逆だったらしい。歩けど歩けど、学校には着かない。もう、道も良く分からなくなってしまった。陽は、殆ど真上に来ていた……

私はまた、偶然見つけた公園に入り、ベンチで項垂れていた。

な……情け無い、ただ学校に行くだけの事すら、できないなんて……

「ほらみる……だから、言ったじゃねえか……」

死神さんが、そう言ってくる。

「……ねえ、死神さん？」

「リユークって呼べよ。」

「……ねえ、リユーク？」

「何だ？」

「あなた、道知つとるんやろ？何で、教えてくれへんの？」

「はあ？何で俺が、そんなことしなきゃいけないんだ？」

「この間は、家まで案内してくれたやないの？」

「ありやあ、ただの気まぐれだ。俺は、死神だぜ。お前の味方でも何でもねえよ！」

言われてみれば、その通りだけ……優しいなんて感じたのは、大間違いだった……その後も散々迷って、ようやく駅に辿り着いた。もう学校まで行く気力は無かったので、電車に乗って元の駅に戻った。その後もかなり迷って、家に帰れたのもう夜だった。

歩き疲れた事と、ようやく家に戻れて気が抜けたのか、強烈な眠気に襲われた。その後の事は殆ど覚えていないが、夕食の後直ぐに、私は眠ってしまった……

《 第三話 》

翌日は、自分の体で目覚めた。

起きると直ぐに、リユークが話し掛けて来る。

「おい、月、あの三葉って女、生きてたぞ。」

「ああ、あの女の時間と、僕の時間は3年ずれている……」

「何だと?」

僕は、机の引き出しの仕掛けを操作し、隠してあったデスノートを取り出す。そして、

三葉の名前を書いた頁を開く。

「?!」

それ以降に書いた名前は残っていたが、三葉の名前を書いた箇所だけ、文字が消えて空白になっていた。

「あれ?名前が消えてるな……」

「そういう事か……」

「ん?どういう事だ?」

「さつき、3年ずれていると言ったろ。三葉は、そのひと月後に死ぬんだ。彗星の破片が落下して、町諸共な……既に死んでいる人間だから、デスノートでは殺せない。名前を書いて、無効だからこのように消える……死人を見てると同じだから、死神の目でも、名前も寿命も見えない。」

「なるほど、そういう事か……ん？何で、3年前の人間と、お前は入れ替わってるんだ？」

「そんな事、僕が知るか！」

何故、こんな入れ替わりが起こるのか……これは重要だ！昨日は、ひと月我慢すればと思つたが、それで本当に終わるのか？元から、過去と入れ替わっている。という事は、何度でも同じ事は起こるかもしれない。それが、1年後か、何年後かは分からないが……

考えなければいけない事は山程あるが、まずは学校に行つた。昨日も三葉は、散々迷つて学校には行けなかつたようだ。無断欠席の、後始末が先だ。

最も、3年の秋ともなれば、受験勉強の方が主で授業などそれ程重要では無い。僕の学校は、東京でもトップクラスの進学校なので尚更だ。今後の事も考え、以後は欠席も多くなる事を事前に仄めかしておいた。これで後は、三葉に入れ替わっている時は学校に行かないで、塾にでも行つて時間を潰してもらえば良いだろう。

最も、三葉が素直に言う事を聞くかどうかは疑問だが……その事は、また、後で考えよう。

学校から帰ったら、ネットで糸守に関して調べまくった。

3年前の彗星落下を含め、徹底的に……そして、ひとつ気になる記事を見つけた。糸守湖が、実は隕石の落下でできた湖ではないかという仮説の記事だ。隕石の落下は、千年以上前と推定されている。もしこれが本当なら、その千年後にまた隕石（彗星の破片）の落下があつたという事か？確率的には、まず有り得ない話だが……

彗星の破片の落下と、入れ替わりに、何か因果関係があるのか？……さてよ、落下のひと月前に入れ替わったという事は、これが目的か？わざわざ、未来の人間と入れ替わるのは……彗星の破片の落下を知らせて、住民を避難させるためか？

そうか、そういう事なら、糸守の住民を助ければ、この入れ替わりは終わる……だが、どうやる？『未来に行つて見てきました』なんて言つても、誰も信じない。数人を信じさせる事ができても、住民全員とはいかない。それこそ、信仰宗教でも信じさせれば可能かもしれないが、とてもひと月では無理だ……

まあいい、これも後で考えよう。いざとなれば、嘘の災害でも起こして避難させればいい。逆に、これを理由に、三葉に言う事を聞かせる事ができるかもしれない。

目が覚めると・・・月くんの部屋だ。また、入れ替わったみたい。目の前に、死神のリユークも居る。流石に今日は、悲鳴は上げなかった。

「お前、三葉か？」

「う・・・うん・・・」

「月から、伝言があるぜ。スマホを見な。」

「え？だつてこれ、使えない・・・」

そう言つて操作すると・・・使える！ロックが外れてるんだ！これでもう、道に迷つても何とかなる・・・と、浮かれてる場合じゃ無かつた。伝言があるのよね・・・

「三葉へ」というメモがあつたので、それを開く。

『三葉、初めましてと言つておこうか。僕は、夜神月。まあ、名前は既に知っているだろうけど。これから説明する事は、君にとつては信じられない事ばかりだと思うが、取り乱さずに読んで欲しい・・・』

信じられない事？・・・何なの？そもそも、この入れ替わりや、死神の存在が信じられないんですけど・・・

『まず、僕と君の間には、3年の時差がある。君の居る時間は、僕の時間の3年前だ。』

「ええっつー！」

思わず大声を上げてしまい、慌てて口を抑えた。また、粧裕ちゃんが飛んで来たら大

変だ。

『更に、君の時間で今からひと月後、ティアマト彗星の破片が落下して、糸守は壊滅的な被害を受ける。』

ええっつ！

今度は、心の中で大声を上げた。

『リンクを貼っておくから、その目で確かめて欲しい。3年前の、10月5日の記事だ。』
私は、そのリンクを開き、その記事を見て愕然とする。

そ．．．そんな．．．

そこには、無残に瓦礫の山と化した、糸守の写真が載っていた。私の家や、宮水神社は跡形も無く、元の糸守湖と同じ様な、丸い湖が残っているだけだ。2つの円が合わさって、糸守湖は瓢箪のような形に変わってしまった。記事には、住民の1／3が犠牲になったと書かれている。

わ．．．私も、死ぬの？四葉や、お婆ちゃん．．．サヤちゃんや、テツシーも．．．
目から涙が溢れ、スマホの上に雫が落ちる。

「おい、そこで固まんよ！まだ、続きがあるんだからよ！」

リンクが、茶々を入れて来る。

うるさいわね！人が悲しみに沈んでなのに、余計な茶々入れないでよ！空気読みなさ

いよ！この死神がっ！

リユークのせいで、ひとりで落ち込んでいるのが、ばかばかしくなってきた。私は、リンクを閉じて続きを読む。

『シヨックだと思いが、悲観するのはまだ早い。これは、君の時間では、ひと月後の話だ。今から準備して、うまく住民を避難させる事ができれば、皆助かる。』

そ．．．そうか、私はまだ生きてるんだ。事前にこの事を知れたという事は、それに備える事ができる．．．あ．．．ありがとう、月くん！

『だが、口で言うほど簡単でも無い。『未来に行つて見てきました』なんて言つても、誰も信じない。証拠の記事を、3年前に持つて行く事はできない。しかも、証人は君ひとりしかないのだから．．．』

うん、うん。

『どうすれば良いか、一緒に考えよう。僕も手伝う。』

うん、ありがとう、月くん。

『その上で、君も僕に協力して欲しい。君が僕と入れ替わっている時の事だが．．．』
ええっつ？

その後の内容を読んで、私は心の中で不平の声を上げた。

『学校には、行かないでくれ。代わりに塾に行つて、一日中自習をしていてくれ。僕の行

く塾は、個人でパソコン相手に進めていくシステムだから、何をやっていても問題にはならぬ。人と会う心配も無い。君が行っている間は、カリキュラムが進まないが、その分は僕がカバーするから心配しなくていい。

だが、学校は不味い。友人に怪しまれるし、何より、君では僕の学校の授業についていけない。』

な・・・なんですってえ〜っ！

『入れ替わって2日ほど、君の学校の授業に出たが、はつきり言ってレベルが低すぎる。こんなぬるま湯に浸かっていた君に、東京一の進学校の授業は理解できない。更に、君は学年がひとつ下だ。』

ば・・・馬鹿にして、な・・・何様のつもりよっ！

『こんな事を書く君のことだ、馬鹿にして、何様のつもりよ！』と思うかもしれない・・・』

あら・・・完全に読まれてる・・・

『頭に来るかもしれないが、これが現実だ。だが、それだけでは納得いかないだろうか、君にもチャンスをおあげよう。』

な・・・何よ、偉そうに・・・

『とりあえず、今日だけは僕の言う事を聞いてくれ。机の引き出しの一番上に、僕が塾で

使っている問題集がある。それを持って塾に行つて、解いてみてくれ。もし、1問でも解けるようなら、もう何も言わない。好きに学校にも行つていい。だが、もし1問も解け無いようなら、僕の言う事に従つて欲しい。』

机の引き出しを開けると、書いてある通りに問題集があつた。試に開いてみると……目が、点になつた……な……何なの？この問題……こ……こんなのとでも……い……いや、1問でも解ければいいのよね？見てらっしゃい、絶対に解いて、月くんの鼻を明かしてやるんだから！

私は、意気込んで家を出た。月くんの分かり易い道案内と、スマホのGPSのおかげで、今日は迷わずに目的地に着けた。けど……

私は机に突つ伏して、全く動けなかつた。心配してか、面白がつてか、リユークが聞いて来る。

「おい、どうした？月の鼻を明かしてやるんだろ？問題解かなくていいのか？」
「うるさいな、黙つてて！」

駄目だ……解くどころか、問題の意味すら、満足に理解できない……
完全な敗北感に打ちのめされ、私は家に帰つた……
部屋の中で、落ち込みながらテレビのニュースを見ていた。

自室にテレビがあるなんて、随分いい生活しているな……でも、エリートだもん

ね。お父さんは警察官で、それなりの地位にいるらしいし、月くんも、将来は警察官になるつもりなのかな？ 私みたいな田舎っぺとは、住む世界が違いすぎる……何か、どんどん卑屈になっていくような気がする……

リユークも、もう茶々を入れて来なくなつた。死神も引くほど、負のオーラが出てるのかな？ そんな時、あるニュースが耳に入った。

『本日、またしても刑務所内で、服役者が心臓麻痺で無くなりました……』

心臓麻痺？……前にも、刑務所内で心臓麻痺つて……?!

私は、突然ある事を思い出した。リユークと初めて会つた時に聞いた、デスノートの事。

「りゅ……リユーク？」

「ああ……何だ？」

「デスノートつて……知っている人の名前を書くと、その人が死ぬつて言つたよね？」

「ああ、そうだ。」

「月くんが、それを持つてるんよね？」

「そうだ、それがどうかしたか？」

今迄、入れ替わりのドタバタで考えなかつたけど、月くん、デスノートを使って何をしてるの？……最初に入れ替わつた時、服役者の死亡のニュースを見た粧裕ちゃん

が・・・

“これって、またキラの仕業かな？”

キラが、犯罪者を殺してる？ じゃあ、キラが、デスノートを持っていて・・・月くんはキラ？

《 第四話 》

翌朝、自分の体で目覚め、リユークに三葉の様子を確認する。

「どうだった？三葉の様子は？」

「相当落ち込んでたぜ。まあ、田舎の件は感謝してたみたいだが、問題集は全然解けなくてな、ずっと沈んでた。」

「そうか、それならば、僕の言う通りに行動してくれそうだな？」

「それはどうかな？」

「何か、問題でもあるのか？」

「気付いたみたいだぜ・・・お前が、キラだって。」

「何だと？」

「そうか・・・だが、これは想定していた事だ。デスノートの存在を知られた以上、遅かれ早かれ、こういう事態は予測していた。だから、最初は三葉の名前をノートに書いたのだ・・・」

「気付いたところで、三葉には何もできんさ。」

「何でだ？」

「デスノートは、僕でなければ机からは取り出せない。お前が、やり方を三葉に教えれば別だが、そんな事はしないだろう？」

「ああ、俺は、三葉の味方でも無いからな。」

「だから、ノートをどうこうする事は、三葉にはできない。僕がキラだという事を、他者にばらさないかという点については、そんな事は絶対にしない！」

「何故、そう言い切れる？」

「僕が捕まれば、困るのは三葉だ。入れ替わる度に、自分は監獄の中だ。それに、僕の協力無しに、糸守の住民を助ける事なんてできないだろう。」

「なるほどな……」

ただ、説得めいた事はしてくるだろうがな……

僕は、スマホを操作する。案の定、『月くんへ』という書き込みがある。

『月くん、初めまして、宮水三葉です。』

糸守の件、教えてくれてありがとう。おまけに、住民の皆を助ける手助けもしてくれ、という事、感謝します。

学校の件は、分かりました。私の頭では、手も足も出ないという事を痛感しました。月くんの言う通りにします。

でも、月くんのやっている事は、正しくないと思います。月くんが「キラ」なんですよね？

いくら、相手が犯罪者だといっても、自分の価値観で勝手に裁いてはいけないと思います。

それでは、月くんも、犯罪者と同じになってしまいます。

お願い、よく考えて下さい。』

ふん．．．そんな事は、数えきれないくらい何度も考えた。その上で、出した結論だ。お前の甘いヒューマニズムには、吐き気がする。

僕が、犯罪者と同じ？それは違う。やつらは、理性を持たない。野蛮な本能だけで、一時の快樂だけを求めている愚民だ．．．いや、奴らだけじゃない、殆どの人間がそうだ。

だから、平和を乱す者には、相応の罰を与えなければならぬ！今の社会の法律では、それはできない！キラこそが、それが出来る者、キラは新世界の神なのだ！

その後、しばらくこのやりとりは続いた。

『まだ、デスノートを使ってるの？一般人が、勝手に他人を裁くなんて間違ってる！考え直して！』



『君には、関係無い事だ。凶悪犯罪とは無縁な、平和な糸守にも影響は無い。』

『でも、知ってしまった以上、無視する事はできない。犯罪を助長しているみたいで。』

『君が、何かしている訳じゃない。彗星の破片落下が終われば、元の他人に戻る。それまで、目を瞑ってあげればいいだけのことだ。』

『でも、＼＼＼って凄い探偵が乗り出して来たんでしょ？もし、月くんがキラだって、ばれたらどうするの？』

全く、何で女つてのは、こうお節介なんだ・・・彗星の破片落下後なら、僕がどうなろうと、三葉には全く関係が無いだろう・・・こんな問答を、繰り返すのも不毛だ。別な事に集中させて、余計な事を考えられないようにした方がいい。特に三葉は、熱中すると、他が見えなくなるようだからな。となれば、議題は当然・・・

『そんな事より、もうあと半月しかない。そろそろ本格的に、糸守住民の避難計画を考えた方がいい。』

『そうだった。でも、皆に言っても信じてもらえないのに、どうやって避難させればいい

『皆は無理でも、何人かには信じてもらわないといけない。その手段は、僕が考える。但し、その人間は、町全体を動かせるだけの、力のある人間でなくてはならない。誰か、心当たりはあるか？』

サヤちゃん、テツシーと学校に行きながら、私は月くんとのやりとりの事を考えていた。
“町全体を動かせるだけの、力のある人間”って、心当たりはあるんだけど……というか、糸守ではこの人しか居ない……

町営駐車場の前を通り掛かると、今日もお父さんが演説をしていた。

もし、皆を避難させるとしたら、消防団の人達にも協力してもらわないといけない。そのような指示を出せるのは、やっぱり、お父さんしかいない……だけど……。10年前、お母さんが亡くなって、お父さんは家を出た。それ以降、私達の関係はうまくいっていない。神社の跡取りを放棄したから、お婆ちゃんとは特に険悪な関係になっている。そんなお父さんを、説得できるだろうか？唯でさえ、常識では信じられないような内容なのに……

学校が終わった後、私は、お父さんと話をしようとして町役場に来た。最終的な説得は月

くんに任せるにしても、それまでに、少しは関係を改善しておかないといけない、と思っただからだ。

私が娘である事は皆知っているのです、すんなりと町長室に通された。

「町長、三葉さんがお見えです。」

事務の人がそう言つて部屋をノックするが、返事が無い。中からは、何か言い争う声が聞こえる。先客がいるのかな？

「失礼します。」

事務の人は、そう言つてドアを開ける。お父さんは、電話中だった。ひどく興奮しているようで、こちらに気付いていない。

「どういう事だ！何で、奴に執行猶予が許されるんだ？」

何の話をしているんだらう？私は、そつとお父さんに近づく……すると、机の上の資料が目に入る。それを見て……私は驚愕する。

「だから……み……み……三葉？」

お父さんが、私に気付いた。しかし私は、お父さんの方は向かず、机の上の資料を睨み付けていた。

「ど……どうということ？……」

「き……聞いていたのか？……」

「あ……あの男が、拘留所から出てくるの？」

10年前、東京で事件を起こした「影月信彦」は、警察に追われ糸守に逃げ込んだ。彼は、糸守の出身だった。尤も、住んでいたのは、小学校の低学年までのようだが……影月は、宮水神社に侵入し、潜んでいた。それに気付かず、神社に行つた私とお母さんは、神社の中で影月と鉢合わせた。姿を見られた影月は、私とお母さんに襲い掛かつて来た。とっさにお母さんは私を庇つたため、影月の持つていた包丁で体を刺された。お母さんを刺した後、影月は御神体の山へ逃げ込んだ。しかし、既に岐阜県警にも手配が回っていたため、糸守にも直ぐに県警の警官隊が来た。逃げ場を失つた影月は、最後は自首をして来た。

お母さんは直ぐに病院に運ばれたが、出血多量で亡くなった。私は、影月は当然死刑になるものと思つていた。しかし、影月は取調べで、お母さんを刺したのは気が動転していたからで、殺すつもりでは無かつたと供述した。だが、そんな筈は無い。完全に殺意があつた。それで無ければ、あんなに何回も刺さない。それに、お母さんの体に包まれていたが、腕の脇から私は影月の顔を見た。気が動転している、男の顔では無かつた。薄ら笑いまで浮かべて、人を刺すことを楽しんでるかのようだった。

影月の裁判は、長期化した。最終的に自首という事と、殺す気では無かつたという供述があつたため、再審などが多くなつていた……。それでも、あの男はもう絶対に、

刑務所に送られ、一生出て来られないだろう、そう思っていた……
「な……何で……」

私は、行き場の無い怒りと、悲しみで、その場に立ち尽くしていた。目からは、悔し涙が溢れてくる。

お父さんは、そんな私にかける言葉が見つからず、同じように立ち尽くすだけだった……

結局、お父さんには、もう何も聞かなかった……いや、聞けなかった。

家に帰っても、私は、部屋に籠って泣くだけだった……

翌朝、月くんの体で目が覚める。昨夜は、泣いたまま寝てしまった。朝、私の顔を見たら、月くんは驚くだろうな……

一晩泣き明かして、少しは落ち着いたが、食欲は出なかった。

不思議だな……この体は月くんの体なのに、心が拒むとお腹も空かないんだ……朝食は断って、何気なしに部屋でテレビを見ていた。いや、正確には、見ている振りに近かった。ニュースの内容は、殆ど頭の中に入って来なかった。

「おい、どうしちまったんだ？」

リユークが聞いて来るが、答える気力も無かった。

—— その時、流れたニュースが、私の頭のモヤモヤを吹き飛ばした。私は、目

を大きく見開いてその画面に食い入った。

拘留所で、被告人が心臓麻痺で死んだニュースだった。だが、そこに書かれていた被告人の名前は……

〃影月信彦〃

か……影月が、死んだ……拘留所の中で？でも、執行猶予だつて……

そこには、影月の犯罪歴も記されていた。糸守での強盗殺人も載っているが、その下に、更に2件の強盗殺人容疑が追加されている……そうか、3年前、執行猶予で出所した後、また犯罪を繰り返していたんだ……やはりこの男は、殺意を持った、根っからの犯罪者だつた……ん？心臓麻痺で死んだつて事は……

「ねえ、リユーク？」

「ん？何だ？」

「この被告人も、月くんがデスノートに名前を書いたの？」

「ん？どうだつたか……おお、そうだ！〃糸守での強盗殺人〃とここに反応してたから覚えてるぜ！確かに、ノートに書いてたな！」

月くんが、キラが、裁いてくれた。法律が裁いてくれなかった、この男を……お母さんの、仇を取ってくれた……

私は今まで、月くんは間違っていると思っていたけど……私のように、家族を殺

されて、その犯罪者が正当に裁かれない事に、憤りを感じている人は他にも居るだろう。そういう人達にとつては、キラは、本当に神のような存在なのかも？・・・キラの行為は、確かに正義では無い、悪だろう・・・でもそれは、必要悪なのかも？・・・

翌日、僕はリユークからこの事を聞いた。そして、薄ら笑みを浮かべた。

「これで三葉も、キラの裁きを、完全には否定はできなくなつたろう。」

「お前、あの影月つて男、かなり前からリストアップしてたよな？まさか、これを狙つて、今迄裁かないで残しておいたのか？」

「さあな・・・」

僕は、何も答えなかつた・・・

《 第五話 》

今日の4時限目は体育だった。

運動自体は好きなんだけど、体育の授業は嫌い。それは、体育教師が最悪だから。

“大田原権三”名前からして古臭いが、中身も時代錯誤の、今時何処を探しても居ないようなハラスメント教師だ。やたら根性論を振り回し、医学的・生體的根拠をまるで持たない。“傷なんてツバつけときや直る！”とか、本気で言っている信じられない男だ。

“体の調子が悪くて見学したい”等と言おうものなら、“そんなもん気力で直さんか！この根性無しが！”と本気で言っ来て取り合わない。女の子には、どうしても避けられないダメな日があるのに、それも理解しようとしない。自分は全く女性に縁が無い（こんな性格だから当然だが）ので、そういう点に全く気付かない。

しかし、月くんは“女子更衣室には流石に入れないので”という事で、体育はいつも見学していると言っていた。いったいどうやって、この世も末教師を言いくるめてるんだらうか？最も、月くんは理論攻撃されたら、こんな男は数秒で頭がオーバーヒートす

るだろうけど……

今日は、マラソンだった。といつても、学校の外を走るので無い。ひたすら、校庭を何周も回るだけ。その理由も、「危険だから」という事だが、何が危険なのか？こんな、車も殆ど走っていない、人通りも少ない田舎に危険等無い。そもそも、生徒の怪我にツバつけときや直るなんて言ってる男が、危険論を言うこと自体ナンセンスだ。どうせ理由は、さぼっている者がいないかどうか、しっかりと監視したいというだけだろう。授業開始からずつと走りっぱなしで、流石に息があがつてきた。30分経つたところで、女子は休憩を許された。しかし、男子は未だに走らされ続けていた。

私達は、疲れて尻餅をついた体勢で、その光景を見ていた。テツシーも、相当辛そう

だと、ひとりだけ、列から大幅に遅れる者が出た。だんだん速度が落ちて行き、数秒で、殆ど歩くのと変わらない速度になってしまった。腹の横に手を当てている。横原が痛くなって、もう走れないのだろう。それは、いつも私に嫌味を言ってくる、松本だった。

「こら！何とろとろ歩いとんのや！ちゃんと走れ！」

早速、大田原から激が飛ぶ。しかし、調子が悪いんだから、仕方無いだろうに……「しっかりとしねえか！この根性無しが！」

終いには、持っていた竹刀で松本のお尻を叩き出した。

「はは、いい気味やね。いつも三葉やテッシーに嫌味言ってるから、天罰や。」

「サヤちゃんが、そう言う。でも私は、そんな気分にはなれなかった。あれは、いくら何でも可哀想すぎる。松本は、涙まで流していた。」

「昼休み、昼食を食べながらも、さっきの体育の話題になっていた。」

「ほんと、辛かったわ・・・脚が痛くて、歩くのも辛いで。」

「ほんまやね、男子は特に、私らの倍は走らされたで。」

「ほんと、自分は走らんで怒鳴ってるだけや、割が合わんで。」

「ほんと、誰か、何とかしてくれへんかな？あのハラスメント教師！」

その時、突然救急車のサイレンが鳴り響いてきた。

「な・・・なんや？」

サイレンの音は、どんどん大きくなって行く。

「え？もしかして、こっちに向かっとんの？」

すると、校内に救急車が入って来た。

「だ・・・誰か、倒れたん？」

「ま・・・まさか、松本か？」

さっきの体育の時の、辛そうな松本の顔が頭に浮かぶ。本当に、体の調子が悪かった

のだろうか？

私達は、慌てて校舎に戻った。そして、人だかりがあるところに向かう。それは、私達の教室では無く、職員室だった。

「おい、何があつたんや？」

最後尾の生徒に、テツシーが尋ねる。

「ああ．．．何か、大田原先生が、突然倒れたんやて．．．」
『ええ〜っ?』

私達は、揃って声を上げた。何で、大田原先生が？苦しそうだったのは、松本なのに．．．

すると、前の方で話している生徒達の声も、聞こえて来た。

「何でも、昼食中に、急に胸を抑えて苦しみだしたそうやで。」

「どうやら、心臓麻痺らしいで．．．」

—— 心臓麻痺 ——

この言葉が、私の脳裏に突き刺さった。

大田原先生が心臓麻痺？さっきまで、あんなに元気で、どこも悪そうじゃ無かった先生が、突然．．．まさか、これって．．．

家に帰って、部屋の中で私は考えていた。

あんな元気な人が、急に心臓麻痺になるだろうか？特に極端に太っていた訳でも無く、年だつてそんなにいつていない。やはり、これはデスノートによるものなの？

あの先生には、月くんも酷い目にあつてるんじゃないだろうか？周りの悪評も聞いている筈だ。まさか、月くんが？……

今朝は、三葉の体で目が覚めた。制服に着替えて、髪を組紐で簡単に纏めたところで、四葉が襖を開ける。

「お姉ちゃん……と、今朝は早いんやね？こはんやよ。」

「うん……直ぐ行くから。」

四葉が下に降りて行つたところで、スマホを確認する。三葉から、一件メッセージが入っていたので開く。

『月くん。昨日、大田原先生が心臓麻痺で突然亡くなりました。まさか、月くんデスノートに、先生の名前書いて無いよね？』

はあ？何を言っているんだこいつ……。糸守の住民は、彗星災害で死ぬからノートに書いても無効なだけだ！もし、大田原がそれで生き残っていたとしても、死ぬのは3年後だ！今じゃない！……。全く、心臓麻痺を何でもかんでも、デスノートに結び付けるんじゃない！

学校に行くと、その話題で校内も大騒ぎになっていた。

こんな人口の少ない町なら、人がひとり死んだだけでも大事件になるんだろうな？東京なんて、1日に何人死んでるか……

テツシーとサヤちゃんも、朝からその話ばかりしている。

「死因は、やっぱり心臓麻痺やて。」

「どっか、悪いところあったんか？」

「それが、先月検診やったばっかで、何の異常も無い健康体だったそうやよ。」

「それが、何で突然？」

「分からへん……罰が当たったんやないの？」

「お狐様の祟りか？」

ふん、くだらない。祟りで人が殺せるなら、デスノートなんていらぬ……

「お・・おい、大変や！」

その時、教室にひとりの生徒が駆け込んで来た。

「昨夜、スナックでもひとり、心臓麻痺で死んだそうやぞ！」

「なんやと？」

教室内が、騒然とする。

1日に、2人心臓麻痺……流石に、これは軽視できないかもしれぬ……だ

が、まだ、単なる偶然という域を脱している訳では無い。そもそも、僕のデスノートでは、現在の糸守の住民は殺せない。

その時、教室の端の、例の嫌味野郎……松本の顔が目に入った。

何だ？……教室の中、全員が驚いた顔をしているのに、あいつ今笑って無かったか？それに、妙に落ち着いている。動揺している様子が全く無い……

翌朝、自分の体で目覚めると、まずリユークに聞いてみた。

「リユーク、お前、糸守に行ったことはあるか？」

「ああ？お前が、三葉と入れ替わってる所か？ねえよ、人間界で俺が行った事があるのは、まだ東京だけだ。」

「お前より前に……例えば、3年前に、デスノートを人間界に持ち込んだ死神は居るか？」

「はあ？そんなの知らねえよ。俺以外の死神が、何やってたかなんてよ……ただ、人間界にデスノートを持ち込んだのは、俺が初めてじゃねえ。以前にも、やった奴は居るぜ！」

そうか、それならば、3年前の糸守にデスノートがあつても不思議では無い。まだ、デスノートかどうかは分からないが……

「おい、何かあったのか？」

「もしかしたらだがな、3年前の糸守に、デスノートが持ち込まれているかもしれん。」
「何だと？本当か？」

「だから、もしかしたらだ！まだ、そうと決まった訳じゃ無い。」

とにかく、もしそうなら、次に入れ替わった時に必ず所有者を突き止める。そして……

朝、自分の体で目を覚ますと、真つ先にスマホを確認した。月くんからの返信が無い。か……あつた！それを開く。

『三葉、大きな勘違いをしているようだが、僕のデスノートでは糸守の住民を殺す事はできない。もし名前を書いて、その人物が死ぬのは僕的时间、3年後だ。過去の歴史を改変する事は、デスノートでもできない……』

ああ、そうか……そうだよねえ……

『だが、君の時間に別のデスノートがある可能性は、ゼロでは無い。』

ええっつ？

『但し、仮にそうでも、ノートの所有者を突き止めよう等とは考えるな！名前を書かれたら終わりだ、下手な行動は慎んだ方がいい。』

それは……そうか。でも……

『この件は、僕に任せてくれ。その代り、君にやっておいて欲しい事がある。』

うん、何でも言つて！

『心臓麻痺で死んだ人間、もしかしたら、今日も誰かそうなるかもしれないが、その人達の、対人関係を調べておいて欲しい。誰かに、酷い仕打ちをしていなかったか？』

うん、うん。

『ただ、調べる時は慎重に、できるだけ目立たないように、こつそりとやるんだ。誰が、デスノートを持っているか分からない。嗅ぎまわっているという事を、知られる事も危険だ。』

うん、分かったわ！

私は、早速月くんの指示に従つて、心臓麻痺で死んだ2人の対人関係を調べた。

大田原先生は、私達も良く知っているから容易だった。ひとり暮らしで、先生達以外にはそれ程親しい人は居ない。ご両親は、既に亡くなられている。生徒には、もちろん酷く嫌われている。直近の被害者は、松本だろう。先生達にはというと、それ程酷く嫌われている訳では無い。付きあい難いタイプとは、見られているみたいだが……

スナックで無くなった人は、“田崎守” 勅使河原建設の従業員だったらしい。今日、お通夜があるので、テツシーは学校を休んだ。テツシーも仲が良かったらしく、いろいろと手伝いに行つたらしい。まだ30代で、ご両親も健在。人当たりが良く、皆に好か

れていた。また正義感も強く、かなり熱血漢だったようだ。もちろん健康体で、持病等の話は全く無かったそうだ。

んくっ……何か、正反対だな。大田原先生は恨みを買ってそうだけど、田崎さんの方は、誰にも恨みなんか買ひそうに無い……やっぱり、唯の偶然だったのかな？

学校の帰り道、たまたま、松本とすれ違った。

月くんが入れ替わっている時に、徹底的に彼の嫌疑行動を無視、もしくは冷笑しているため、最近、私に絡んで来る事も無くなっていった。だけど、今日は感じが違った。

私と目が合った時、嫌疑を言う時のような笑みを見せながら、こう言った。

「おい、宮水。あんまり調子に乗んなや……俺を、怒らせん方がええで。」

そうして、そのまま去って行った。

な……何なの？今のは？……

《第六話》

次に、月くんと入れ替わったのは2日後だった。

その間に、もうひとり心臓麻痺で無くなった。

今度は、町の外れにひとりで住む、殆ど浮浪者と変わらないような生活をしている人だった。人付き合いも全然無く、仕事もしないでふらふらしていた。絡まれて被害に合う人もいたので、町役場の職員が何度も注意に行っていた。

これはこれで、前の2人との関連性が無い。こんな生活をしていれば、体にもあちこち異常があつただろう。心臓麻痺で死んでも、不思議では無い。

しかし、私はそれより、松本の一言が気になっていた。大田原先生以外の人と彼の接点は無いが、何か怪しい。その事を、スマホのメモに残しておいた。

後は、月くんに任せるしかない。

「なあ、本当に、糸守にデスノートがあるのか？」

リユークが聞いて来る。

「分からへんよ。深入りはするなって、言われとつたし。」

「そうか……」

「でも、月くん優しいな。」

「ん？」

「犯人を突き止めようとしたりするな!」、名前を書かれたら終わりだ!」って、私の事心配してくれてるんやね。」

「それは違うと思うぜ。」

「何ですよ?」

浮かれていたところに水を差されて、私は不機嫌そうな顔をリユークに向けた。

「お前が死んだら、入れ替わりも無くなって、糸守住民の避難も出来なくなるだろ? そうなったらリセットだ。また、何年か後に、一からやり直しになるかもしれないねえ。それは面倒だから、今回で全部終わらせたいだけじゃねえのか?」

「そ……それは……」

た……確かに、そうかもしれないけど……月くんなら、そんな事考えそうだけど……な……何も、今それ言わなくてもいいんじゃないの? 人が、せっかくい気分になつたのに、わざわざ、それを突き崩すなんて……本当に、空気読めないわね! この死神はっ!

私は、リユークを思いつきり睨みつけた。でもリユークは、訳が分からずに首を傾げ

るだけだった……

スマホの三葉のメモを見て、僕は考える。

確かに、松本が怪しい。あの時、ひとりだけ笑っていたのも気に掛かる。だが、大田原はともかく、田崎に関しては接点が無い。人気者だから妬んで……なんてのは、安直すぎる。

学校に行くと、テツシーが暗い顔をしていた。そういえば、田崎とは仲が良かったと書いてあった。そのせいだろう。

「おはよう、テツシー……」

「ああ……」

本当に元気が無い。少し、話を聞いてみると……

「ほんまに、ええ人やった。俺を、弟のように可愛がってくれて……」

とりあえず、かける言葉が見つからない。

「俺やお前に嫌味を言う松本を、叱ってくれた事だつて……」

何？

「て……テツシー、田崎さん、松本に説教してたの？」

「ん……ああ、あいつ、うちの会社の前で、俺に嫌味言つた事があつて、そんな時側に

居た田崎さんが……」

これで繋がった……後は浮浪者だが、それは多分……

僕は学校を早退して、3人目の被害者、浮浪者のような生活をしていた男が発見された廃屋に来ていた。

特に事件性が無いので、もう誰もここには居ない。身寄りの無い男だったから、花を添えに来る者も無い。

その男が殺された理由は、恐らく、見られたからだろう。デスノートを持っているところを。もしくは、家ではまずいので、ここに隠しているのかもしれない。それを見つければそうになったか……

しばらく待つと、やはり現れた。松本だ。

松本は、廃屋の中に入って行く。僕は気付かれないように、後に付いて行く。

奥の部屋（といっても、窓は無くなって壁もところどころ崩れている。更には、床も無くなって完全に地面なので、外とあまり変わらないが）に入って、屈んで何かをしている。恐らく、地面を掘っているのだろう。

地面から、平たい缶を掘り出し、それを開き、一冊の黒いノートを取り出した。

間違い無い。デスノートだ！僕は、物陰から出て松本に声を掛ける。

「おー」

「な．．．み．．．宮水．．．何で、お前がここに？」

「やっぱり、お前がデスノートの所有者だったんだな？」

「な．．．何で、お前が．．．で．．．デスノートの事を知つとるんや？」

松本は、かなりうろたえている。

「．．．お前は、それを使って、何をするつもりだ？」

「そ．．．そんなん、お前には、関係あらへんやろ！」

「それが、大有りなんでな．．．お前の目的を、はつきり聞きたい。」

「お．．．お前に、話す義務は無い！そ．．．それ以上、近づくな！近づいたら．．．お．．．

「お前の、名前を書くで！」

「書いてみるよ！」

僕は、ゆっくりと松本に近づく。

「く．．．来るなああああつ！」

松本は、デスノートを開く。そして、慌てて何かを書いている。多分、三葉の名前を書いているのだろう。だが、僕は三葉じゃ無い。

僕が、松本の目の前まで行くのに、10秒程掛かったか？あと、30秒．．．

「もう一度聞く。お前はそのノートを使って、何をするつもりだ？」

「そ．．．そんな事、聞いても無駄や！お．．．お前はもう．．．死ぬ！」

「それはどうかかな？」

僕は、しばらくそのまま待った。残りの30秒が過ぎるのを……そして、30秒が過ぎた……

「ど……どうして？……何で、死なへん？」

「さあ、どうしてかな？……答えろ。お前は、デスノートを使って何をする？」

「そ……そんなん、気にいらへん奴を……始末するだけや！」

「……失格だな……お前には、新世界の神たる資格は無い！」

僕は、怯えきつて震えている松本から、デスノートを奪い取った。

「か……返せええええっ！」

おもちゃを取り上げられた子供のように、松本はノートに飛び付いて来る。

「ふんっ！」

そこを、思い切り殴り飛ばす。

「ぐへっ！」

松本は頭から地面に倒れ、そのまま気を失ってしまう。

「?!」

デスノートを手にした事で、それまで見えなかった、死神の姿が見えた。リユークとは大分違う、白い、骨のような体をした死神が、そこに居た。

「お前……名前は？」

「私を見ても驚かない……お前も、デスノートの所有者か？」

「さあな？ お前に言う義理は無い。」

「私の名は、レム……」

「レム……か……」

さて、このノートをどうするか？

例え取り上げても、松本が所有権を放棄しなければ、こいつのノートである事は変わらない。何より、こいつの記憶も消えない。それでは、今後に支障をきたす。

三葉の名前を書かれたが、死が無効になったものだからこれは消える。だが、松本は三葉に、デスノートの存在を知られたと思っている。もしノートの切れ端等を持っていたら、明日以降にまた、三葉の名前をノートに書くやもしれん。まさか、ここで松本を殺す訳にもいかないし……

しばらく考えた後、僕は、松本の体を探った……あつた！ こんな奴なら、隠れて煙草でも吸ってるかと思つたが、ビンゴだった。僕は、松本の懐からライターを取り出した。

「まさか……ノートを燃やすつもりか？」

「そうだ！ そうしなければ、こいつの記憶は消えない！」

「止めろ！それは私のノートだ！勝手な事は許さん！」

「お前の許しを、もらうつもりは無い！」

「どうしてもやるというなら、お前の名前をこのノートに書くぞ！」

レムは、もう一冊のデスノートを取り出した。やはり、2冊持っていたか。

「この男は知らなかったようだが、私は、お前の本当の名前を知っている。」

「書きたければ、書け！」

僕は、構わずライターの火を点ける。レムは、自分のデスノートに、僕の名前を書き始める。僕は、そのままライターの火にノートに翳す。ノートは、瞬く間に燃え上がる。

「馬鹿め……」

吐き捨てるように、レムは呟く。僕は、完全に炎に包まれたノートを離す。地面に落ちたノートは完全に燃え尽き、灰になって消える。

「これで、もう松本は、デスノートの事を完全に忘れた……もう1冊のノートも、奴に渡すか？」

「いや……もういい……私は、死神界に帰る。お前の死を、見届けてからな。」

「ふふふ……僕の死だと？」

そのまま、僕とレムは睨み合っていた。そして、レムがノートに僕の名前を書いてから、40秒が過ぎた。

「な……何故だ？何故死なない？私には、お前の名前が見えているんだぞ！」

ふん、名前が見えていても、この顔は僕の顔じゃ無い。僕の顔を知らないお前に、デスノートで僕を殺すことは出来ない！

「……夜神月……面白い奴だ……大して面白い事も無かったが、お前に会えただけでも、人間界に来た甲斐はあった……いずれ、また会おう。」

そう言い残して、レムは、大空に飛び上がって消えていった……
さてと……

地面には、松本が伸びたままで転がっている。

このまま、帰る訳にもいかないか？ぶん殴ってしまったからな、三葉が恨まれる。

「ん……んんっ！」

ようやく、松本は目を覚ました……僕の膝枕の上で。

「ん？……うわあああっ！」

驚いて、松本は跳ね起きる。

「どうしたの？」

「な……何しとんのや？」

「膝枕。」

「な……何で、そんな事しとんのか聞いとんのや！」

「だって、あなたが気絶してて、全然気付かないから。」

「き．．．気絶って、お前が殴ったんやろ！」

「え？何で？」

「何でって．．．ん？何でや？」

「変な夢でも、見たんじゃないの？私 came たら、もう気絶してたよ、あなた。」

「え？ほんまか？」

「うん、ほんま。」

嘘だけど．．．．．

「あれ？そやったか？．．．そもそも、何でここに来たんやつけ？」

「とにかく、早く帰って休んだ方がいいよ。それじゃあね。」

そう言つて、僕は廃屋を後にした。松本は、訳が分からず、ずっと首を傾げていた。

次に入れ替わった時に、スマホに三葉からのメモがあった。

『ちよつと、月くん、松本にいったい何をしたの？何か、気が付くといつも私の事見ていて、目が合うと、真つ赤になって目を逸らすのよ！メチャクチャきもいんですけど！』

僕は、思わず吹き出してしまった。

《 第七話 》

『月くん、彗星の破片の落下まで、もう日が無いよ！どうするの？考えてくれるって言ったじゃない！』

『仕方が無いだろう、デスノート事件なんかがあつて、それどころじゃ無かつた。それに、君に頼んだ件の回答をまだもらつて無い。カリスマ性のある人物のあたりを、付けて欲しいと言つたよね？』

『そうだった、ごめんなさい。やっぱり、適任者は、糸守町長である私のお父さん。宮水としき。しかいません。お父さんなら、役場の職員はもちろん、消防団も動かせます。住民の信頼も厚いです。ただ、お母さんが亡くなったのがきっかけで、お婆ちゃんと確執ができてしまつて、今は一緒に住んでいません。』

『そうか、やはり、あの町長しかないか。母親が亡くなったというのは、例の影月による強盗殺人か？だが、その件は今はどうでもいい。』

『頑固そうな男だから、説得には骨が折れそうだ……しかし、あういうタイプは、味

方に付ければ大変頼りになる。それには、感情的になつては駄目だ！冷静に話し合つて、僕を信じ込ませなければ。

ただ、まだ説得のための材料が足りない……

「お姉ちゃん、はよせんと、出掛けるよ！」

下から、四葉の呼ぶ声が聞こえる。急いで制服に着替えて、下に降りると……
「何で、制服着とんの？」

と、四葉が言ってくる。何だ？今日は日曜日では無いし、祭日でも無い。どういふことだ？そもそも、何処に出掛けるつもりなんだ？……

今日は、山の上にある御神体に、口噛み酒とやらを奉納する日らしい。この町だけの行事なので祝日では無いが、学校や仕事は休みらしい……三葉め、そういう事はちゃんと申し送りしておけ！

僕と四葉、婆さんの3人で出かける。宮水神社の、裏手の山を登って行くようだ。

しかし、何故御神体が神社には無く、山の上にあるんだ？普通は、神社の中か、そうでなくても直ぐ側にありそうだが……

結構な山道を、ひたすら歩く。

「お婆ちゃん、何でうちの御神体は、こんな遠くにあんの？」

四葉が聞く。僕も知りたいが。

「繭五郎のせいで、わしにも分からん。」

繭五郎？誰だ、それは？

「・・・誰？」

僕は、小声で四葉に聞く。

「え、知らんの？ “繭五郎の大火” で有名やよ。」

繭五郎の大火？何だ、それは？

まだまだ、先は長そうだ。僕や四葉は何とかなるだろうが、婆さんには、この山道は辛いだろう。非常に、歩みも遅い。これでは、いつ御神体に辿り着けるか分からん
い・・・

「お婆ちゃん！」

痺れを切らして、僕は、婆さんに背中を差し出す。婆さんは、につこり笑って、

「ありがとうよ。」

と言って、僕の背中におぶさる。

立ち上がる時に少しよろけたが、婆さんは、あまりにも軽かった。おぶつて歩くのも、大して苦にはならない・・・

山頂までの道中、僕の背で、婆さんが日本古来の“ムスビ”の事を語った。

糸を繋げることも、人を繋げることも、時間が流れることも、全部同じ言葉 “ムスビ

“を使う。それは神様の呼び名であり、神様の力でもある。では、僕と三葉の入れ替わりも、何かの“ムスビ”なのか？……”

ようやく頂上に着くと、そこには、大きなカルデラ状の窪地があつた。その中央には、巨大な岩と一体化した巨木があり、それが御神体らしい。

おかしいな？この山は、火山では無い。火山でも無ければ、こんなカルデラは隕石でも墜ちなければできない……さてよ、これも、彗星の破片の落下によつてできたのか？だとすると、それは糸守湖よりも昔……まさか、ティアマト彗星接近の度に、ここに破片が墜ちている？

これが御神体なら、神社と場所が離れているのも分かるような気がする。こんな場所に神社を建てても、通うのが大変だ。逆にこんな物を、町の近くまで運ぶのも困難だ。僕は、その御神体を囲むように流れる、小川の前まで行く。

「ここから先は、隠り世。」

婆さんが、また語る。この先はあの世、つまりは死後の世界であり、戻するには、僕達が一番大切なものを、引き換えにしなければならぬらしい……その一番大切なものが、口噛み酒なのだ……この酒は、三葉と四葉が米を噛み、唾液と共に吐き出したものらしい。これが、三葉達の半分なのだそうだ……

御神体の前まで行くと、小さな入り口があり、下に降りる階段が付いていた。中まで

降りて行くと、小さな祠があり、口嘯み酒はそこに奉納された。

僕はふと、天井に目をやる。何かを描いてある。蠟燭のわずかな光ではつきりは見えないが、紐のような、蛇のような……いや、もしかすると、これは彗星か？何故？こんなところに彗星の絵が？……知っていたのか？ここに御神体を祀った人々は、彗星の接近の度に、この地に破片が墜ちる事を……それを、事前に知らせるために、入れ替わりの力が……いや、待て、それならば、何故その事を古文書等で後生に伝えない？特に、宮水神社にそれが伝わっていないのがおかしい！

御神体を出て、山を降りると、もう陽が雲の後ろに隠れ掛かっていた。

「もう、カタワレ時やなあ……」

婆さんが呟く。

そういえば、古典の授業で教師が言っていたな……夕方、昼でも夜でも無い時間……人ならざるもの、魔物や、死者に出くわす時間……ふん、こちらは毎日のように、死神（魔物）と顔突き合せている。カタワレ時など関係無いな……

考え込んでいる僕に、婆さんが横から声を掛ける……

「あんた今、夢を見とるな……」

「お……お婆ちゃん？」

「あんた……三葉やないやろ？」

「わ……分かるんですか？」

「わしも昔……そんな時期があつた……何故か、今迄忘れつつたが……」

やはり、入れ替わりは、宮水家の女子に受け継がれて来た力なのか？しかし、何故それが伝承されていない？……さてよ、今朝来る時に、四葉が……

「お婆さん？」

「何や？」

「〃繭五郎の大火〃 って、何ですか？」

今日も、月くんの指示通りに、塾に行つて勉強していた。

といつても、月くんのカリキュラムは私にとつては五里霧中で全く理解ができないので、粧裕ちゃんに教えられるように、中学高学年の数学を勉強していた。

先日、粧裕ちゃんに

〃お兄ちゃん、数学教えて！〃

と言われて安請け合いたんだけど、1問解くだけでえらく時間が掛かつて、怪しまれた。いくら東京の進学校だからって、中学の数学でさえ手こずるなんて、本当に情けない。こんなんで私、東京の大学に行けるのかな？

リユークはそんな私を見て、いつも〃クツクツクツ〃と笑っている。ほんとに、この

死神はっ！

その塾の帰り道、私はある事に気付き、小声でリユークに話し掛ける。

「ねえ、リユーク？」

「何だ？」

「私、誰かにつけられてへん？」

「何だ、気付いてたのか？」

「や・・・やっぱり？」

さつきから、背後に視線を感じていた。

ここ最近、糸守では松本がほぼストーカー状態で、やたらと私をつけ回している。ただ見ているだけで、それ以外は何もしてこないの害はないんだけど、きもい！

月くんが変なフオーロしたからんだけど、デスノートの件を解決してくれたんだから、あまり文句も言えない。ただ、そのせいで、自分を見つめる視線には特に敏感になっていた。

「警察かな？」

「多分な。」

もしかして、月くんがキラだってばれちゃったの？で・・でも、私が勝手に判断しちゃまずいよね？ここは、普通に振る舞って、とにかく、月くんに知らせなくっちゃ

!

一応は、気付かない振りをして、そのまま帰宅した。ただ、必要以上に緊張していたので、少し不自然に見られたかもしれない……

その夜、何日かぶりに、月くんのお父さんが早く帰宅した。家族全員で、夕飯の食卓を囲む事になる。私が月くんになっている時では、初めての体験だった。

私は、お父さんの正面に座る。物凄く、威厳を感じる人だ。うちのお父さんもそこそこだけど、その何倍も立派そう……さすが、月くんのお父さんだけの事はある。

「勉強の方はどうだ？月？」

「え……うん、まあまあかな？」

いきなり振られて、とりあえず適当に返した。

「いつも学年トップの、自慢の兄です！はい！」

「自慢の息子です、はい。」

粧裕ちゃんとお母さんがそれに続く。確かに、月くんは自慢の息子だろうけど……今、中にいるのは、恥ずかしい私なんですけど……

でも、お父さん、何か元気が無い。

「疲れてるみたいだね……お父さん。」

つい、そう言ってしまう。

「ん？ああ、今回の事件はそうとう難しそうでな、とても一筋縄じゃないかん……」
今回の事件って……キラの事？

「捜査本部の偉い人が、キラは、学生の可能性が高いと言って来てな……」

え？

「お父さん、食事の時にそんな話は……」

「ああ、すまない。以前にも、月のおかげで解決した事件があったから、ついな……」
警察のお偉いさんにまで、頼りにされるなんて……どこまで凄いの？月くんって……
で……でも、キラが学生ってばれてるの？まさか、それで尾行が？……
月くん、大丈夫かな？今後は、このお父さんとも闘う事になるのかな？

尾行の件も気になるけど、もしお父さんに事実を知られたら？月くん、お父さんの名前までデスノートに書くの？

その夜は、彗星落下の事より、そっちの方が気になって中々寝付けなかった……

《 最終話 》

10月2日、夜。宮水家の居間に、家族全員を集めた。三葉のお父さんも、無理を言つて呼び寄せた。糸守の存亡に関わる、重大な話があると云つて……

僕の前に、お婆さん、三葉のお父さん、四葉が並んで座っている。

「わざわざ、忙しい中集まつてもらつてすみません。」

家族の前に、畏まった話し方をする僕に、お父さんと四葉は怪訝な顔をする。

「まず、最初に言つておきます。お婆さんは既に気付いています。僕は、三葉ではありません。」

『はあ?』

この言葉に、お父さんと四葉は、〃何を言つてるんだ?〃という顔をする。

「冗談を、言っている訳ではありません。僕は、今から3年後の東京の男子高校生です。三葉さんとは、ひと月程前から、何度となく入れ替つています。」

「な……何だと?三葉、そんな戯言を言うために呼んだのか?私は、もう帰るぞ!」

お父さんは、早くも怒つて立ち上がった。

「待つて下さい!怒る前に、話を最後まで聞いて下さい。」

僕は、毅然とした態度で、お父さんを見つめた。その気迫に圧されたのか、お父さんは腰を下ろした。

「信じられないのも、無理はありません。でも、宮水家の女子には、代々この不思議な力が受け継がれているんです。お婆さんも、少女時代に、この入れ替りを体験しています。」

「えーっ？ほんと、お婆ちゃん？」

「ああ．．．ずっと、忘れとつたんじゃがね、この子を見て、思い出したんよ。」

「では、何故、そんな力が受け継がれているのか？それが、重要なんです。」

お父さんの顔から、怒りが消えた。少し、戸惑っているような表情に変わっている。

「糸守湖が、どのようにしてできたか、ご存知ですか？」

「ん？．．．知らないが．．．」

「恐らくですが、1200年前、ティアマト彗星の落下でできたんです。」

「な．．．何だと？」

「御神体のある、山の窪みを知っていますか？」

「ああ．．．」

「あれも、恐らく彗星の破片の落下でできたものです。」

「何？」

「そうでなければ、火山でも無いあの山に、あのような窪地はできません。これは、糸守湖よりもっと古いです。多分、2400年くらい前でしよう。」

「ちよつと待て、それじゃ、1200年毎に彗星の破片が墜ちていると言うのか?」

「そうです。その彗星が、ティアマト彗星です。これが、2日後に地球に最接近する。」

「ま・・・まさか?」

「そのまさかです! 2日後、また糸守に彗星の破片が墜ちるんです!」

「馬鹿な! そんなのは、推測でしか無いだろう!」

「僕は、3年後の高校生だと言いましたよね? 既に事実として、知ってるんです。3年前の10月4日、つまり明後日、ここに彗星の破片が墜ちて、町が崩壊した事を!」

「な・・・」

全員、あまりの事に絶句している。入れ替りを認識しているお婆さんも、この事実には驚いている。

「この事実を伝え、住民達を事前に避難させて救うために、3年の時を越えて、入れ替りが起こっているんです!」

「ま・・・待ってくれ、君が3年後の人間という事は、未だに信じ難い。そもそも、昔からそういう事実があつたなら、何でその事が、この町に伝承されていないんだ?」

「されていました。ですが、ある事件で、全ての古文書が消失してしまつたんです。」

「な．．．何だ？その事件とは？」

「『繭五郎の大火』です！」

「な．．．なんと．．．」

その後、豊穰祭の舞にも、彗星落下を暗示するものがある事、御神体の洞窟の中の天井に、彗星の絵が描かれている事等も説明し、何とか理解してもらえた。

「わ．．分かった。お祭りの日に、臨時避難訓練を行う。それで、住民全員を、糸守高校に避難させればいいのか？」

「はい。糸守高校は、3年後もそのまま残っています。あそこは、災害の範囲外です。」

「すまんが、最後に、君の名前を教えてもらっても良いか？」

「はい．．．立花、瀧です。」

「瀧くん．．．ありがとう。君の好意、絶対に無駄にしないよ。」

「宜しく願います。」

翌朝、自分の体で目を覚ますと、まず三葉からのメモをチェックする。

「何？尾行されていた．．．本当かりユーク？」

「ああ。」

「警察か？．．．いや、もし警察なら、先に父さんが何か探りを入れて来る筈だ．．．」

という事は、『L』のさしがねか？」

警察の情報が漏れている事に気付いて、警察関係者を調べ出したのか？だとしたら、警察以外の者か？・・・極秘裏に動いている可能性が高い。まずは、相手が何者かをつきとめるのが先決だ。だが、今はまだ不味い。あと、2日待つか・・・

「なあ、月？」

「何だ？」

「糸守の件は、片が付いたのか？」

「ああ・・・片付いた。」

「それじゃあ、もうあの女とお前が入れ替る事もねえのか？」

「何だ、寂しいのか？まさかお前・・・三葉に惚れたか？」

「馬鹿言え！死神にそんな感情はねえよ！ただ、あいつをからかうと面白かったんなよ。」

「はあ？・・・はははははは、三葉が聞いたら、顔を真っ赤にして怒りそうだ。」

10月3日、彗星の破片落下の2日前。朝起きると、スマホに月くんからの、最後のメッセージが入っていた。

何故、最後なのかと・・・

『三葉、昨夜、君のお婆さん、お父さん、四葉に、入れ替わりの事と彗星の破片の落下の

事を話し、納得してもらった。お父さんが、臨時の避難訓練を実施し、町民全員を糸守高校に避難させる……」

そう……良かった。お父さん達、信じてくれたんだ。

ここまでは、本当に嬉しい報告だった。でも、その後は……

『これで、糸守の人達は助かる。その見返りと言ったら卑怯かもしれないが、最後に、ひとつだけ頼みがある。』

これで、僕と君の入れ替わりは終わる。元の、赤の他人に戻る。だから、以後は二度と、僕には近づかないでくれ。

僕はキラだ。これからも、犯罪者を裁き続ける。そして、それを良しとしない、警察や“L”との本格的な闘いが始まる。

君は、僕の正体を知っている。本来なら、生かしておいてはいけない存在だ。最初は、僕も本気で、君を殺そうとしていた。だが、今は、君を殺したく無い。

君が僕の近くにいれば、そこから僕の正体が、“L”や警察に知れる危険がある。しかし、君が僕に一切近づかなければ、僕と君を繋ぐ物は何も無い。入れ替わりの事実は、宮水家の人間しか知らないし、僕の本名を知っているのは、君だけだ。

もし、それでも君が僕に近づくとこののなら、僕は、君の名前をノートに書く。どうか、僕にそんな事をさせないでくれ。

さようなら、三葉。』

最後の方は、涙で目が曇って、よく読めなかった。

私はスマホを胸に当て、上を向いて目を閉じる。それでも目からは、滝のように涙が溢れ、頬を伝っていく。

その夜……

「お婆ちゃん、お願いがあるんやけど……」

私は、お婆ちゃんに言つて、髪を短く切つてもらつた。

お婆ちゃんは、心配そうに聞いてくる。

「瀧くんと、なんぞあつたんか？」

瀧くん？……あ、そういえば……

『僕の本名を知っているのは、君だけだ』

お父さん達には、本当の名前を言っていないんだ……それは、そうだよ……

「ううん、そうやないの……」

心配をかけないように、そう答えた。

仕方が無い……私が居たんじや、月くんが、余計に危険になる……私では、足手纏いにこそなれ、何の手助けもできない……忘れるしかない。元々、私と月くんは出会う筈の無い2人だった。神様のきまぐれで、一時、出逢っただけなんだ……

さようなら、そして・・・ありがとう、月くん・・・

10月4日。豊穰祭が開催される中、その行事のひとつとして、町民全員をあげての臨時避難訓練が実施された。

普通なら、どうしても参加できない者は免除されるものだが、今回だけはそれは許さず、お年寄りであろうと、赤ん坊であろうと、病人であろうと、本当に全員の参加が義務付けられた。当然、反発も多かったが、そこはお父さんが何とか周りを言い聞かせた。

そのおかげで、糸守の住民は救われた。

こうして、私と月くんの入れ替わり生活は、完全に幕を閉じた・・・

三葉との入れ替わりが無くなった後、“L”との闘いが激化した。僕らを密かに尾行させていたFBIを始末したら、今度は部屋に隠しカメラを仕掛けられた。

これを入れ替わっている時にやられたら、完全にアウトだった。やはり、死神で無い神も、僕に味方してくれているようだ。

そして、とうとう“L”は、僕の前に姿を現した。偽名を使い、何重もの罫を仕掛けて僕にボ口を出させようとした。だが、こちらもそれを利用して、何とか奴を始末しようとする策を練った。それこそ命を懸けた、騙し合いの始まりだった。

そんな時、また、僕にチャンスが巡って来た。

この時間の日本に、もう一冊のデスノートが落とされた。それを使った、第2のキラが現れたのだ。しかもこいつは、死神の目を持っていた。

第2のキラは、テレビ局を使った派手なデモンストラーションの後、僕に直接コンタクトを取って来た。僕のスマホに、呼び出し状を送り付けて来た。何故、僕がキラだと分かったのか？その理由は謎だ。しかし、この呼び出しを断る訳にはいかない。こいつを“L”や警察に取られてはまずい。僕の側に取り込むか、それが無理なら、早い内に始末しなければならぬ。

僕は、待ち合わせ場所で待った。だが、そこに現れたのは……
「み……三葉？」

3年経ち、少し大人びてはいるが、紛れも無く、糸守に居た三葉だった。

そして彼女は、バッグから一冊のノートを取り出す。赤い表紙だが、ノートにははつきりと“DEATH NOTE”と書かれている。

三葉は僕に近寄り、ノートを僕の前に差し出す。僕は、そのノートに触れる。

そこに現れた死神は……

「やはり、また会えたな、夜神月。」

レム、お前だったのか、三葉にデスノートを渡したのは。

「月くん、私も闘う。本当に犯罪の無い、理想の世界を創るために……足手纏いになるようななら、いつでもノートに私の名前を書いて！私は本当なら、3年前に死んだ身。

こんな命、惜しくは無いわ！お願い、私にも手伝わせて！」

「わ……分かった、三葉。」

そして、レム！お前にも見せてやる！僕達が創る、真の理想郷を……